

自己点検・評価（令和4年度プログラム実施分）

自己点検・評価の視点	評価総括	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	良好	プログラム開始2年目となる令和4年度は、大学の収容定員5490人（入学定員1310人）に対して946名が本プログラムを受講した。収容定員に対する履修率は約17%であり、初年度（0.4%）から大きく改善することができた。改組の年次進行中である工学部を除き、今年度から人文、教育、医、生物資源学部の1年生が必修科目として本プログラムに関わる科目（データサイエンスⅠとⅡ）を受講しており、受講生の9割以上の学生が必修2科目4単位を修得することができている。履修率、履修状況ともに良好と判断した。
学修成果	概ね良好	授業アンケート（1～5点評価）の結果、データサイエンスⅠの総合満足度は3.91（人文4.1、教育3.6、医4.0および生物資源4.0）、データサイエンスⅡは3.60（人文3.5、教育3.6、医3.4および生物資源4.0）であり、全体的に満足度は高かった。個別項目で見ると、ⅠとⅡの理解度は総合評価とほぼ同じ3.86と3.47、新知識獲得に関しては4.37と4.01であり、非常に高い評価が得られた。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	概ね良好	アンケートの総合評価に関しては上記のとおりであるが、自己調査（自分でプラスαの調査や勉強をした）に関してはⅠが3.75でⅡが3.85となった。データサイエンスⅠでは情報リテラシーとデータリテラシーを学び、データサイエンスⅡではそれぞれの学部にて設定した目標に対して体験型学習を重視した取り組みを実施していることから、Ⅱでは総合評価を上回る評価が得られたと思われる。学習成果は概ね良好に得られていると判断した。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	概ね良好と推察	授業アンケートの中で直接的に推奨度を問う項目は設けていないが、上述のように「新しい知識の習得」はデータサイエンスⅠ、Ⅱともに5段階評価で4を超える評価を得た。後輩等他の学生への推奨度も高いのではないかと推察される。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	大きく改善	改組の学年進行中の工学部を除く人文、教育、医、生物資源学部の4学部で「データサイエンスⅠ」と「データサイエンスⅡ」の2科目4単位必修化を行った。その結果、プログラム履修率は大学学部学生定員に対して約17%となった。医学部に5～6年生が在籍している学生定員があり、工学部においてもデータサイエンスⅠに相当する科目を新設し、かつプログラミング関係の科目をベースにデータサイエンスⅡを開講することが決まっていことから、今後も計画的に履修率の向上が見込まれる。
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	未実施 (今後実施予定)	今後、3年に1回の割合で卒業生と卒業生が就職した企業など（事業所）に対して行う追跡調査「卒業生・修了生・事業所へのアンケート調査」の中で、「情報機器の活用」「分析する力」「判断する力」「企画する力」「構想する力」など、データサイエンス教育に関わる項目について卒業生からの回答に対して分析を行う。事業所に対しては「情報機器を活用する力」「情報を収集して適切に処理する力」などの項目に対してデータサイエンス学修プログラム実施前後の状況分析を行う予定である。

<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>未実施 (今後実施予定)</p>	<p>本教育プログラムを修了した卒業生と卒業生の就職先企業に対しての同時調査が可能な体制が整っている。そのため、産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見を収集する予定である。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>積極的な取り組み</p>	<p>数理・データサイエンス館（通称CeMDS=セムズ館）において、体験型学習と学生同士で問題解決を図るための仕組みとしてCeMDSサポートデスク（大学院生スタッフが学部生の相談に応じる）を運営している。CeMDSでは、3Dプリンタなどの機器や実習・研修スペースなども提供しており、データサイエンスIIの授業の中での活用も行われている（タンパク質の立体構造を3Dで観察、3Dプリンタを用いて立体構造を理解するなど）。データサイエンス学修プログラムの周知やデータサイエンスセミナーなど、在学生と教職員への啓蒙活動を行い、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を大学構成員全員に対して理解してもらうことの努力を行っている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>標準的な取り組み</p>	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすることができるよう、情報教育専門委員会委員を通して各学部の授業担当者と情報共有、データサイエンスIとデータサイエンスIIの授業内容改善に役立てる。</p>